

調査団体名	財団法人 いびがわ 生命(いのち)の水と森の活動センター	団体代表者名	成瀬富士一
設立年	2008年4月	団体URL	http://www.inochinomizutomori.or.jp/index.html
活動地域	揖斐郡揖斐川町鶴見周辺	調査員	松井、後藤、滝、石井、田村、植田、宮前、曾我部
取材日	2011/1/11	レポート作成者	曾我部行子

徳山ダム、光の部分を負うべくダッシュ！

<立ち上げの経緯と活動内容>

2008年4月にセンター組織と施設はオープンしたが、実質は5月連休から始まった。ダムが造られると必ず策定されるという水源域ビジョンがあるが、徳山ダムの完成を踏まえて「揖斐川水源地域ビジョン」が策定(2007.2)され、「生命の水と森の活動センター」は、その中核プロジェクトを行うことを前提に立ち上げられた組織である。プロジェクトの主な目的は、①水源地域保全 ②上下流交流 ③地域活性化 ④情報発信 である。

体験学習に力点を置き、1. 森林の作業体験 2. 炭焼き体験 3. 森と水のふれあい体験教室 4. ものづくり教室 5. 環境学習教室 6. ダム学習教室 7. 天体学習教室 8. 徳山の歴史文化教室 9. 源流地域の食体験教室 を運営して、2010年度(11月現在)は、151団体4,839名を受け入れた。来年度も7~8割の予約で埋まっているようだ。

冬季は、クロスカントリースキー、和かんじき、スノーシューによる自然観察、イグルーづくりなど。全部含め、23プログラムを実施している。よって、成瀬さんには今のところ、休日がない。成瀬さんは、3人のスタッフと4人の体験学習施設管理者の施設長であるとともに、揖斐川町の水源域ビジョン推進指導員でもある。

<会のモットー(何を大切にしているか)>

安全な体験学習を基本前提の上で、次のことを大切にしている。

- ① 自分の子や孫が久しぶりに来てくれているという気持ちでの体験を実施(例えば、楽しく、ケガをさせない、自然に興味を持つ感性を持たせる等)。
- ② 守秘義務の徹底(いろんな学校や子ども会など多様な子どもたちを受け入れているため、批評めいたことは一切言わない)。
- ③ ここ水源地域でしかできない体験をやってもらう。

例えば、

○子どもたちを近くの杉原山(789m)に、全員で安全に登・下山させるために子どもたちに役割を任せ、サポーターを8人に1名つけている。

○揖斐川本流を下る「川遊び体験」のためにライフジャケットを用意し、1グループ5人程度のサポーターをつけるなど安全には格別配慮している。

○冷水でアレルギーを起こす子どものために、ソーラーで沸かしたシャワーやお風呂を用意して好評を得ている。

○一周3kmのオリエンテーリングでは、スタッフにトランシーバーを配備したり、不明者防止のため定点で記念写真を撮る先生に撮ってもらい、人数把握を行っている。

○山歩きの安全を祈る気持ちで、山の神様に祈ったオリジナルの「安全祈願のお札」を提供している。

<設立から現在に至るまでに変化したこと>

気持ちそのものは変わっていないけれど、少し余裕が出てきたため、毎年新しい企画を加えていきたい。プロジェクトは、未来の希望である子ども主体に動かしたい。

<連携している団体・専門家・自治体など>

○水資源機構、揖斐川水源域ビジョン推進協議会、3県1市(岐阜県・愛知県・三重県、名古屋市)、揖斐川流域13市町。

○揖斐川町水源域ビジョン推進課、いび川水縁フォーラム(NPO等10団体)を設立し、毎月水曜日に集まって勉強会を実施。事務局をしている。

○水源地域対策アドバイザー(国交省)、NPO揖斐自然環境レンジャー、水源地域サポーター(ボランティア30名登録)。

○当センターは、既往の「(財)いびがわ」の内部組織であるが、公益目的の独立採算の組織。

<今までに行った調査・研究>

特に調査をしているということはないが、外来生物に関しては、移入防止研修会をこれまで2回行っている。

<現在直面している課題>

○清掃、環境パトロールを週2回実施。そこでのごみの収集は、当初より区域を限定せずに行っており、2009年度は110kgを集めた。
 ○ダム上流地域の私有林を買収して公的な管理に移す計画があり、進められている。ただ、買った森は施業しないという計画のようであるが、放置すれば多様な生態系保全の意味からも心配している。
 ○野生動物のナラ、ブナなど実のなる木の減少や、結実の豊凶(ナラ類は1年、ブナは3年周期でしか豊作がない)により、餌が不足している。そこで、ナラ、ブナ等の育苗を子どもたちに託している。さらに工夫していきたい。

<今後やってみたいこと>

○新しい企画の一つとして、門入地区の原生林ツアーを試行的に実施している。門入地区には約3,000haの、ブナ・ミズナラ・トチなどを中心にした手つかず森がある。水資源機構の避難小屋施設があり、水資源機構はダム湖を渡るために車を積める船を持っている。その施設や船を活用して、案内人を付けた「原生林ツアー」を2012年度に本格実施するよう調査研究中である。これが実現すれば、他の地域がやれない差別化した企画になると意欲を燃やしている。
 ○また、4,500年前の縄文式囲炉裏があって使用可能なため、それを使った食体験などを引き続き実施したい。
 ○冬季の企画として、赤ちゃんのファーストスプーン「愛スプーンづくり体験」を実施し、水源地域の自然環境意識の醸成を図りたい。

<そのためにはどんな情報・人脈が必要か>

指導員の調達と30人のボランティアの旅費などに充てるため、各種団体の助成金をできるだけ得て実施した。助成金の申請など、公務員時代の経験が役立っている。また、森林管理、カモシカ調査、登山道整備などの経験が豊富なため、特に依存しなければならない相手はいないが、アウトドアサポートシステムの北川氏などに指導を得ている。さらに来場者を増やす意欲を持っていて、下流域への広報が欠けていることを気にしている。今後は、魅力的なキャッチコピーで都市住民へ誘いかけることを念頭におきたい。

<チームオリジナルの質問>

質問内容: 徳山ダムといえば、自然保護上想起するのが、クマタカなど猛禽類の営巣がダム工事の範囲にあったこと。映画「水になった村」に登場した門入地区は、山の恵みを駆けずり回って調達して食べている暮らしと、ダム建設による消失の姿であった。クマタカは？ 門入地区のその後は？

答え: クマタカの営巣は、水資源機構がモニタリングを続けているようだ。問い合わせてみることは、気になっている市民の務めかもしれない。
 門入地区の原生林ツアーは、センターの運営と徳山ダムの影の部分に光を当てる意味でもいい企画であり、成瀬さんは、門入地区の元気な人もガイドとして視野に入れているとのことであった。

<その他、調査団体から伝えたいこと>

ホームページでは、徳山ダム建設の理由である下流域の安全確保のデータがなかった。野村さん(森と水辺の技術研究会)に聞いたところでは、堤防の水位が120cmも下がる役割を果たす箇所があるようだ。そのことを、どうしてダムの建設理由に明確に書かないのか、不思議である。



「生命の水と森の活動センター」施設入り口



成瀬さんから話を聞く調査メンバー。外は雪景色

<執筆者の感想(心に残ったこと)>

「ダムはムダ」とダム反対派はただ言い、「必要なダムもある」という良識派の答えを抹殺してきたのが、ダムありきのダム派であった。ばく大な税金を使ったのだから、データによる説明責任を果たしてほしいが、いったい誰がそれをしてくれるのだろうか。徳山ダムは本当に必要だったのかどうかの基本的な質問への答えは不明確なままであるが、今回の調査はそこに焦点はない。徳山ダムは、日本では二度と建設されることがない規模のダムとして未来に残るそうだが、その盤石の土木構造物は、それゆえにこそ建設理由を求められてきた。コンクリートから環境へと言うは安い。土木建設事業を単に環境に反するものと位置づけられないために、誠実な努力が望まれている。木曾川導水路問題しかりである。批判だけに陥ることのない提案、データの共有があつてはじめて、徳山村の消された歴史が無駄にならずにすむ。

映画「水になった村」で何より残酷だったのは、村から下りたおばあさんが、こたつで老化し始めている光景であった。徳山で山を走り回っていたら、決してなかったであろうことが起こっていた。だから、この調査は、初めは気が重かった。それでも、そのことを忘れさせるほど、成瀬さんは誠実で、ひたむきな人であった。

徳山ダムが持つ暗いイメージを払拭しようと一身に負っているような実行力は、敬服に値する。ダムのマイナスを成瀬さんにだけ負わせることは、下流域の人間にはできないことだ。

近いうちに、門入地区の原生林ツアーに同行したいし、クロスカントリースキーはぜひやってみたいと思っている。